

## 愛しきもの

藤井 雅人

舞妓が歩く

——そう 舞妓さんは歩いてはるんどす  
こともなげに 街路のうえを  
二十一世紀の思いを煩う人々にまじって

数百年を跳躍して

なにげなく現在いまによりそう舞妓

老いた楠のかたわらに立つ時

彼女は木とおなじ齢になる

花簪はいつしか解け

花びらは宙の迷路をたどり

時の川を流れる花筏に舞いこむ

春の花 風 せせらぎ

あらゆる永久とわに愛しきものらと結託して

たち現れる彼女を どのように迎えようか

だらりの帯の揺れの

柳の枝のようなあてどなさを称えようか

しかし どんな無粋な賞め言葉にも

彼女は白くきよらかな面を背けるだろう

——舞妓はただの舞妓どすえ と囁きながら